

ふるさとのかほ

平成16年(2004年)野間顕彰会だより 3号

野間清治顕彰碑建立五周年記念

巨匠の作品二五〇点一堂に展示

講談社の初代社長である野間清治が収集した近代日本画を中心とする美術コレクションは、一般に「野間コレクション」と呼ばれ、現在は財団法人野間文化財団が所蔵しています。

野間コレクションの収集は、大正一〇年(一九二一)前後からはじめられ、そのほとんどは野間清治が急逝した昭和三年(一九三二)ころまでに収集されています。

野間コレクションの特色は、横山大観、竹内栖鳳、川合玉堂、当時の画壇の大家たちとの交流を通じ、彼らと弟弟子、後輩たちまで多数の画家の作品が含まれていることがあげられます。そしてこのコレクションの中で、最も特徴的であり、量的にも質的にも中核をなしているのが、六平友麿による色紙群の存在です。

この色紙群のうち、数

的には少ないものの異彩を放つのが、百数十点におよぶ「富士百態」です。木村武山、川端龍子、川合玉堂、山口蓬春、土田麦僊ほか四十余名の画家たちが、それぞれ個性的に富士の描写に取り組んだ作品で、昭和三年に大阪の高島屋百貨店で開催された「畫時草山大展覧會」で展示するために収集されました。

これが架橋となり、野間清治は本格的に色紙収集に取り組み始めました。そしてこのとき「十二月月圖」という趣向が選ばれたので、

この「十二月月圖」の制作を依頼された画家たちは百数十名を数えました。色紙という、簡略に描かれたものと見なされがちな色紙群は、画家たちによって丁寧に書き込まれた、水準の高い作品群であると言えましょう。

十二月月各々の風情を各一枚ずつの色紙に込めるといった主題に対し、花鳥、山水、人物などそれぞれ得意とする画家たちが様々な解釈で挑み、十二枚一組として生み出していた佳作の数々は、貴重な美術作品であるばかりか、昭和初期の画壇の状況を窺える上で、美術史的な示唆に富む資料群でもあります。今回の展示では、野間コレクションの収集の経緯を踏まえて、野間コレクションの概要をご覧いただきます。特に色紙十「十二月月圖」については、初めての本格的展示の試みとして、多くの作品から厳選した数タイトルについて十二枚一括で今展示中です。野間清治の故郷、桐生市において本展を開催することになり、(株)講談社・桐生市文化事業団のお力添えに感謝します。

野間コレクションの精華

平成16年 1月10日(土) - 26日(月)

10:00 - 19:00 (最終日)

桐生市市民文化会館 展示室

野間文化財団 野間顕彰会 野間清治顕彰碑建立五周年記念